

今年も復活祭を迎え、本格的な春が始まった。キリスト教徒でない多くの日本人も、スイスに住んでいると復活祭と無縁ではられない。教会で磔のイエス様を見る度に己の罪深さを再認識するキリスト教徒は、また受難曲という形態の音楽ドラマを聴いて、身代わりになって罪を償ってくれた神の子イエス様に忠誠を誓い、彼の復活を自分達の罪が許された証として共に祝う。

キリスト教徒でもないのに、父なる神に敬虔な気持ちが湧いて来たことがあるだろうか。個人的にはバッハを聴いた時、歌った時にその瞬間が幾度となく訪れた経験が蘇る。バッハの音楽を体験すると、彼の、神への敬愛に触れ、キリスト教徒になりたくなってしまふ。しかし、人間の神に対する敬愛は、信じる神の形が違っていても、心が洗われる気がするものだ。こうしてバッハは、人類の普遍の音楽として宇宙に送る音楽に選ばれたのだろう。

私達がバッハと一般に呼ぶ人物は、ヨハン・セバスチャン・バッハである。生誕330年に当たる今年、彼の足跡を辿れる『バッハ週間』という催しを取材して、バッハが今も息づく中央ドイツの街や村に触れる貴重な体験をした。ライプツィヒに飛んで電車で南下したが、フランクフルトからの旅程もお勧めだそう。

『トゥーリンゲン バッハ週間』はバッハにゆかりのある15の地を巡りながら、復活祭前から3週間以上かけて催される音楽祭だ。バッハ一族の多くが活躍し、ヨハン・セバスチャンの両親が結婚したエアフルト、ヨハン・セバスチャン・バッハが1685年に生まれたアイゼナッハ、10歳の時に両親と死別し、年の離れた兄の家に身を寄せたオルトルーフ、最初の結婚式を挙げたドルンハイム、11年間楽師長を勤めたワイマールなど、時間が止まったような空間で体験するバッハの音楽は、300年前に確かにそこに存在していたバッハの想いと共鳴して心に響いた。

音楽祭のオープニングを飾ったのは、トゥーリンゲンの至る所で入場料無料で催された『ハウスコンサートの長い夜』で、大好評だった。そして翌日に正式なオープニングセレモニーとして、アルンシュタットのバッハ教会で『マタイ受難曲』が演奏された。名福音家として活躍しているテノールのクリストフ・プレガルディエンが指揮をし、息子のジュリアン・プレガルディエンもテノールパートを歌う親子共演で話題になっていたが、この日福音家を歌うはずだったテノール歌手が病気になる、クリストフ・プレガルディエンが指揮しながら福音家を歌うという大役を果たす事になった。

始めは、フレーズが終わる頃には、彼の頭の中に次に指揮する音楽が浮かんで来ていることが解ってしまう落ち着きのなさで、歌が終わるとすぐに、聴衆に背を向けて指揮し始めるのが邪魔に感じられた。しかし福音家というのは、もともとナレーターのような役割で、キリストの受難劇の進行を節をつけて語る役なのだが、その福音家がオーケストラも指揮するという事で、ドラマが進むにつれ、本当に体験した物語を披露しているような錯覚を覚

えさせ、大変効果的であった。

そしてバッハも弾いていたオルガンで奏でられるその音楽が、300年の時を超えて私達の心を揺さぶるのは当然なことかもしれない。イエス役のディートリッヒ・ヘンシェルは、人間味のあり過ぎるイエス像だったが好演していた。前出のジュリアン・プレガルディエンは大器を感じさせ堂々として頼もしさを見せた。他の若手歌手陣も高レベルで、ル・コンセル・ロレンの雄弁なオーケストラ、ソリストの集まりのような意気込みを見せたバルタザール・ノイマン合唱団と、3時間に及ぶ壮大なドラマに集中して聴き入っていた満員の聴衆に感銘を受けた。

翌日は、ドルンハイムでバロック音楽の四重奏コンサートが開かれたり、アイゼナッハやワイマールでも、別の演奏者による

『マタイ受難曲』が演奏されており、聴き比べるのも興味深かったのだが、悩んだ挙げ句、エアフルトのトーマス教会で開かれたイギリスのア・カペラグループ Voces 8 のコンサートを聴く事にした。

日本にも3度招かれているという彼らは、バッハに対して全く新しいアプローチを示し、古くならない彼の音楽を再認識させた。"Der Geist hilft unserer Schwachheit auf" BWV226と"Singet dem Herrn" BWV225のバッハ作品2曲の他、500年の時代にまたがる様々な音楽を、それぞれ適切な唱法で披露したが、一番素晴らしいのは、イギリスのシンガーソングライター、Kate Rusby の "Underneath the Stars" で、現代のテイストで歌った後に又16世紀の作品に戻ったりするのを聴けるのは、スリリングな体験だった。

今でこそバッハが偉大な音楽家だったという事実に疑問を抱く人はいないが、彼の死後、一時期完全に忘れ去られていた時代があった。メンデル

スゾーンがそれに腹を立てて、必死でバッハの音楽を復活させ、今があるのだ。彼が生涯に書き上げた多くの楽譜は、商店街の包み紙に使われていたり、息子や未亡人が二束三文で売って生活していたため、価値が下がってしまったという見方もある。また、最近彼の作品とされている多くの曲は、実はこの第二の妻が書いたという説も出て来ており、まだまだ目が離せないバッハ研究だ。

2005年にリニューアルしたというこの『バッハ週間』は今年で10年目の節目を迎え、この数年で訪問者数が3倍になったという。来年は今年よりももっとパワフルなプログラムを用意しているらしい。是非一度は体験したいパワースポットだ。バッハの音楽と共に、宗派にとらわれず、神に帰依して魂を浄化させたい方は、以下の処方箋をお試し下さい。



Thüringer Bachwochen 2016

2016年3月18日から4月10日まで、ドイツの Thüringen, Eisenach, Weimar他、各地で開催。  
2015年12月からチケット販売開始。  
詳細は [www.thueringer-bachwochen.de](http://www.thueringer-bachwochen.de)

